

第16回 日本SPF豚研究会 講演要旨

平成18年5月29日

日本SPF豚協会 年次報告 - SPF豚認定CM農場の生産成績について -

日本SPF豚協会 (全農畜産サービス㈱) 坂口 一平

日本SPF豚協会は1993年にSPF豚農場認定規則を制定し、翌1994年からSPF豚農場認定制度を実施している。このうち、CM農場の認定基準は生産成績とヘルスチェックの結果および生産工程管理を総合的に評価して行っている。日本SPF豚協会は2004年度よりこれらCM農場の生産成績を集計し、年次報告として公表することにした。この度、2005年度のCM農場生産成績が集計できたのでその内容を報告するとともに、生産成績集計の活用方法について提案する。

SPF豚100頭一貫5年間 - 3Kから3T養豚へ -

渡邊 幸男

横浜の畜産は、昭和40年代には牛・豚・鶏の畜産農家が約5,500戸、中でも養豚業は1,580戸 飼養頭数24,517頭でしたが、都市近郊の大型開発が進み、畜産環境問題等で廃業し、現在は昭和40年代と比較しますと戸数では約10%の16戸、飼養頭数では53%の約13,000頭(肉豚含む)が飼養され、戸数は激減したものの年間約20,000頭の肉豚が出荷されています。

横浜の養豚の歴史を語るとき、かつて横浜市 of 畜産行政は昭和42年頃から清浄豚の作出に取り組み、清浄豚を市内養豚農家に配布していましたが、当養豚場では一般豚を約20年間飼養していました。

平成11年度に効率の良い養豚経営に発想の転換を図り、3K(汚い きつい 休日なし)から3T(たまには旅 楽しむ)養豚、100頭一貫5年間の養豚経営に取り組みましたのでその成績を報告します。

豚における注射用動物用医薬品の不適正使用による注射部位の病変形成

全農家畜衛生研究所 小野 雅章

食肉処理場、小売店あるいは食卓で食用に適さない異常な食肉が発見されることがあり、頸部のような注射を実施する部位の皮下や筋肉に肉芽腫や線維化巣が観察された場合には注射が原因として疑われる。しかし、わが国で販売されている注射用動物用医薬品は国家検定に合格したもので用法・用量が守られていれば安全性に問題はないはずである。したがって、出荷時に病変が認められた場合には、注射の用法や用量が不適正だった可能性がある。ところが豚肉の場合、生産者を特定するのが困難であることが多く、注射歴からどのような注射液をどのように注射したため病変が形成されたのか明らかになるケースは少ない。そこで、市販注射用動物用医薬品を不適正に使用した場合の病変を明らかにするため、99日から111日齢の豚に市販動物用医薬品を不適正な用法・用量で注射後55日から90日目に剖検して注射部位の病変を肉眼的、組織学的に確認した。なお、試験は2004年に実施した。その結果、アルミゲルアジュバント加不活化ワクチンの沈殿物、オイルアジュバント加母豚用不活化ワクチン、オイルアジュバント加不活化ワクチン2種の混合物、オイルアジュバント加不活化ワクチンとフルオロキノロン系抗菌剤の混合物、およびワクチンにオイルを添加した液を注射した豚では、それぞれ5頭中4頭、5頭中5頭、5頭中3頭、5頭中3頭、10頭中10頭で、注射部位に単発あるいは多発性に結節が形成され、組織学的には肉芽腫あるいは肉芽腫性炎が観察された。フルオロキノロン系抗菌剤を規定の10倍量注射した豚では、10頭中9頭に肉芽腫性炎が認められた。内寄生虫駆除剤を用量の2倍量注射した豚では、10頭中2頭で組織学的に線維芽細胞の増生が認められた。このことは動物用医薬品の不適正使用で注射部位に病変が形成されうることを示唆しており、このような病変を防止するためには注射用動物用医薬品を用法・用量どおりに使用することが必要である。

新たな繁殖技術としての豚胚の体外生産と非外科的移植の可能性

(独)動物衛生研究所 吉岡耕治

卵巣から採取した卵子を体外で成熟・受精・培養して受精卵(胚)を作出(体外生産)し、代理母の子宮へ移植(胚移植)して産子を得る技術は、品種改良や優良家畜の増産、慢性疾病の正常化などへの貢献が期待されます。また、新たな遺伝形質を持つ個体の導入に際しても、生体ではなく胚で輸送することが可能なことから、輸送コストの低減ばかりでなく、感染症伝播の防除にも有効です。胚の体外生産は、安価に胚を供給できるため、牛では商業的にも利用されていますが、豚では、体外生産胚の品質の低さなどの問題から、子豚の生産には活用されていません。また、豚の子宮は複雑な形をしているので、豚での胚移植は主に開腹手術をして行われていましたが、特殊な設備・技術を必要とするため、生産現場での利用は困難でした。しかし、体外生産胚を用いて、開腹手術を行わない非外科的胚移植を行えば、低コスト・軽労力での子豚生産が可能となります。豚胚の体外生産と非外科的移植技術の近年の研究の進展と実用化に向けた取り組みについて紹介します。

/ 以上